

福田洋一著『ツォンカパ中観思想の研究』

根本裕史

一

本書『ツォンカパ中観思想の研究』は長年にわたって日本のチベット学を牽引してこられた福田洋一氏が、これまでに発表されたツォンカパ中観思想に関する研究の成果をまとめたものである。仏教論理学・認識論の研究者としても知られる著者は、一九九〇年代中頃からツォンカパ中観思想に関する幾つもの重要な論考を発表してきた。本書は既出論文に加筆改訂を行った上、新たに九章立てで構成したものである。

本書の基本的立場は序章に示されている。著者はツォンカパの中観思想に発展段階があったと捉え、『菩提道次第大論』著作以前の「形成期」（一四〇二年以前）、『菩提道次第大論』を著作した「初期」（一四〇二年頃）、『善説心髄』と『正理大海』を著作した「中期」（一四〇七年頃）、『菩提道次第小論』と『密意解明』を著作した「後期」（一四一五年以後）に区分する（p.66）。そして、ツォンカパ中観思想には常に変わらない幾つかの基本命題があるとする一方で、その発展段階に応じて「思想的に変化」（p.18）があったという点に注意を喚起する。

本書はツォンカパという一人の人物の思想的展開の解明を目的とするため、後代のゲルク派の註釈文献や、ツォンカパが依拠するインド仏教文献への言及は極力避け、「ツォンカパの言葉のみに基づいて理解できること」（p.80）に限定した記述に徹している。本書の課題はインド・チベット仏教史における思想的展開を探ることでもなければ、ゲ

ルク派僧院で發達した教学的解釈について論ずることでもない。あくまでツォンカパ内部での思想的變化を「歴史的視点から」(p.17) 解釈することを本書は目指している。

二

次に本書の内容を概観する。目次に従って本書の構成を示すと以下の通りである。

序章

第一章 中觀派の不共の勝法

第二章 聖文殊の教誡による中觀思想の形成過程

第三章 初期中觀思想における自立論証批判

第四章 二つの二諦説

第五章 『入中論』の二諦説と中觀派の不共の勝法

第六章 自性と縁起

第七章 自らの特質によって成立しているもの

第八章 中期中觀思想における言語論的転回

第九章 二つの自性

終章

著者によれば、ツォンカパの初期中觀思想の中心をなすのは、無自性なるものにおいて縁起の働きと縁起する存在

の設定全てが成り立つという考え、すなわち「中観派の不共の勝法」(dbu ma pa'i thun mong ma yin pa'i khyad chos)と呼ばれる存在論である(pp.42-43)。本書の第一章から第五章までの前半部では「中観派の不共の勝法」の思想圏にあるツォンカパの見解が論じられる。第六章以降の後半部では「中観派の不共の勝法」から派生する諸問題が論じられる。

第一章では、ナーガールジュナの『中論頌』第二章に依拠してツォンカパが導き出した「無自性」と「縁起」の一体性に関する見解が論じられる。著者はそれを「縁起を論証因として無自性が論証される」、「無自性なるものにおいて輪廻から涅槃に至るまでの縁起する存在全ての設定が成り立つ」、「縁起の意味が無自性なる空の意味として現れる」という三つの基本命題に集約させている(p.44)。第一命題は、論証学あるいは推理論の観点から「中観派の不共の勝法」を述べたものであり、第二命題は「中観派の不共の勝法」の導入意図を明らかにするものであり、第三命題は「縁起を理解する知が空性を無媒介的に認識する」(p.45)という中観派のみが有する優れた思想的特質を示すものである。ツォンカパはこれらの点を論ずるに当たって、(一)「単なる存在」と(二)「自性による存在」、(三)「端的な非存在」と(四)「自性の非存在」をそれぞれ区別し、(一)と(四)は中観派の立場においても否定されることはないと言く(p.61)。以上の事柄がツォンカパ中観思想の「根本的な枠組み」(p.68)をなしている。

第二章では、ツォンカパ初期中観思想の形成過程が伝記資料や書簡などに基づいて論じられる。伝記によると、ツォンカパはその形成期において、ラマ・ウマパという行者を媒介にして聖文殊にまみえ、中観思想をめぐる問答を交わした(pp.69-98)。当初、ツォンカパは、中観派の立場では「何も承認されず、何も把握されない」と理解し、縁起する存在を否定する虚無論的見解を抱いていたが、文殊の教えを受けて、縁起する存在と無自性なる存在を一体のものと考える「中観派の不共の勝法」を確立するに至ったという。著者は「聖文殊からの啓示」という神秘的に脚色された叙述の中に、ツォンカパの思想形成過程が示唆されていると指摘する(p.119)。

第三章では、自立論証批判をめぐる問題が「中観派の不共の勝法」との関連のもとに論じられる。チャンドラキールティが『プラサンナパダー』においてバーヴィヴェーカの自立論証を批判し、ブッダパーリタの帰謬論証を擁護したことにより、自立論証派の帰謬論証派の分岐が決定的になったということが、チベットで広く知られている。ツォンカパの見解によれば、両派の本質的相違は空性を論証する方法にあるのではなく、むしろ論証方法の前提となる存在論の相違にある。自立論証批判の真の意図は、論証式の構成要素における自性の存在を前提とする自立論証派の實在論的思考を退けることにある。ツォンカパの自立論証批判は、「単なる存在に基づく言説の量によって成立する論証を、論理的である限り全て承認する道を開くもの」(p.166)であり、無自性なるものにおいて一切の設定が成り立つという「中観派の不共の勝法」と軌を一にするものである。

第四章では、「中観派の不共の勝法」に基づくツォンカパ初期の二諦説と、『入中論』の影響の下に構築された後期の二諦説の相違が論じられる。初期の二諦説は、存在の無自性であるという側面すなわち勝義諦と、縁起するという側面すなわち世俗諦の二つが「同一の基体において矛盾することなく成り立っている」(p.157)という点を強調するものである。一方、後期の二諦説は、認識主体の視点の相違によって、世俗諦と勝義諦を「分断」(p.361)するものである。後期二諦説における世俗諦は、凡夫の無明によって真実と誤認された対象に過ぎず、実際には虚偽であり、非存在である。また、後期の勝義諦は、対象顕現を欠く仏智によって直接知覚される内容であり、「端的に諸対象が存在しない」という真実義を指す (p.176)。ツォンカパは前期の二諦説を「後期においては放棄」(p.28)している。後期の二諦説は、「中観派の不共の勝法」という統一的原理を失った結果、思想的な力という点で「退歩」(p.179)していると著者は論評する。

第五章は前章の附論であり、二諦論を説く『入中論』の偈頌に関するツォンカパの理解の変遷が論じられる。ツォンカパは初期著作において、世俗諦と勝義諦の一体性と無矛盾性を『入中論』から読み取るが、後期著作においては、

世俗諦と勝義諦の二者が存在として同一 (ngo bo gciṅ) でありつつも概念として異なる (ldog pa tha dad) という点を強調する。著者はツォンカパ後期中観思想における二諦説を、ダルマキールティのアポーハ論に基づいて分析し (p.209)、排他的二分法に由来する世俗諦と勝義諦の異なりは、認識内容の違いもしくは概念上の差異を示すものであつて、存在論的な差異を意味するのではないため、ツォンカパの様々な言明を整合的に理解可能であると結論している。

第六章では、「中観派の不共の勝法」を構成する概念である縁起と、否定対象である自性の概念が論じられる。ツォンカパは縁起に二つの意味を認める。すなわち、「因縁に依存して生じること」と「構成要素に依存して仮設されること」である。中観派の論理によって否定される自性とは、自立的で他に依存しない存在、すなわち縁起しないものである。これらの考えに依拠して、後代の学僧チャンキャ・ルルペードルジェは、縁起に三つの意味を与えている。すなわち、「自らの因によつて生じること」、「構成要素に相待して自らの存在を得ること」、「仮設の基体に依拠して仮設されること」である。これらの内、第三の縁起は「帰謬論証派独自の縁起説」であり、「もつとも深遠なる縁起」として説かれたものである (p.244)。それは一切法が言説知に依存して設定されるというツォンカパの見解に依拠するが、ツォンカパ自身がそれを「縁起」として言及しているのではないという点に著者は細心の注意を払っている (pp.244, 248)。

第七章では、ツォンカパ中観思想において否定対象となる「自らの特質によつて成立しているもの」(rang gi mtshan nyid kyi grub pa) という用語の厳密な意味規定がなされる。rang gi mtshan nyid (Skt. svalakṣaṇa) は「そのもの特有の性質」を意味するアビダルマ文献の「自相」や、「効果的作用の能力あるもの」並びに「現量の対象」を意味する論理学文献の「自相」とは異なり、實在論者が存在の設定根拠として想定する「自らの特質」を意味する。著者はこのことを指摘した上で、ツォンカパが『善説心髓』前半部で論じる唯識派の三性説の議論を比較考証し、具

格助詞 *kyis* は「同一性」や「様態」ではなく、「根拠」を表示する機能を持つと結論している (pp.272-274)。本章の末尾に、帰謬論証派が考える仮設の構造は唯識派の三性説に見られるものと同一であるが、唯識派が仮設の拠り所として依他起性の存在を求めるのに対し、帰謬論証派は全てのは単に仮設されただけの存在であると考え、「どこまで行っても実体に根拠を求めることはない」(p.281) という点が論じられる。

第八章では、ツォンカバ中期中観思想における言語論的な考察方法が分析される。『善説心髓』が説くところによれば、實在論の立場に立つ学説論者は、ある事物の存在を指定する際、当該の事物にその概念や名称を付与する實在上の根拠のありかを考察して探し求め、それが見出されるならば、その事物を「自らの特質によって成立しているもの」として指定することができると考える (pp.300-301)。この考察は自性の有無についての正理知による考察ではなく、「存在を設定するために行う言語論的な考察」(p.310) である。實在論者による存在指定に関するこのような考えは「おそらくインドの典籍には出てこないであろう」ものであり、瑜伽行派の三性説の議論を下敷きにして「釀成」された可能性があると著者は推定する (p.303)。また、「自らの特質」(*rang gi mtshan nyid*) という用語は、チベット論理学の述定理論に現れる「定義的特質」(*mtshan nyid*) にも通じ、言説を述定するための根拠を意味すると著者は考えている (p.304)。

第九章では、ツォンカバ中観思想において否定対象とされる「自性」と、存在の真のあり方である法性に等しい「自性」という、二つの自性をめぐる諸問題が論じられる。二つの自性の区別に関するツォンカバの見解を最初に論じたのは評者であったが(根本裕史「チベット中観思想における自性の概念」『インド論理学研究』7、pp.283-299、二〇一四年)、著者は当該のツォンカバの議論を批判的に検討した上で、「ツォンカバの思想自体としては、法性と同義の自性を設定する必要はなく」、「二つの自性があるとするのはチャンドラキールティの言葉を祖述する必要から導入された」に過ぎないと断定する (p.323)。というのも、著者によれば、ツォンカバ自身の思想の本質をなすのは「中観派

の不共の勝法」であり、その枠組みにおいて、法性と同義の自性という概念を導入する必然性はないからである。確かに、ツォンカパは二つの自性について言及する。しかし、それは「ツォンカパの記述が必ずしも整合的ではないこと」(p.346)に起因するのであって、「法性」が実在ではないにせよ仮の名称としては存在するという彼自身の言明も「ツォンカパの主張の意図とは異なる」(p.327)というのが著者の見解である。

終章では、ツォンカパの中観思想を三期に区分する意義と、「歴史的な視点からの考察」の有効性が確認される。

三

本書はツォンカパ中観思想研究において重要な視点を提供するものである。著者は『菩提道次第大論』に登場する「中観派の不共の勝法」をツォンカパ中観思想の核心と捉え、その中に含まれる考えを幾つかの単純な命題に還元することにより、彼の思想の全体像を鮮明に描き出すと共に、その思想の持つ意義を明確にしている。

「自らの特質によつて成立しているもの」という用語に関する著者の分析も、これまでにはなかった独自のものである。既に先行研究で指摘されていたように、この用語は瑜伽行派の三性説に由来し、ツォンカパが帰謬論証派に独自の思想を記述するために再解釈したものである。著者は具格助詞 *dris* の機能が「様態」や「同一性」ではなく「根拠」であることを論証した上で、ツォンカパが導入した「言語論的視点」からの分析において、命名行為や概念設定の根拠を担うものとして實在論者によつて想定されるのが「自らの特質」であるとの見通しを示している。さらに、チベットのサンプ僧院で生まれた述定理論との関連についての指摘も重要である。著者が第七章・第八章で行っている分析は、ツォンカパの中観思想が、ナーガールジュナやチャンドラキールティの思想という縦の線の上に、瑜伽行派の三性説や初期チベット論理学の述定理論といった横の線を重ね合わせて紡がれた所産であることを如実に示している。初期チベット論理学の本格的研究は、「カダム全集」影印版の出版により、ようやく始まったところであ

る。今後、述定理論への理解が深まれば、ツォンカパの意図が一層明確になるであろう。

四

一方で、本書はツォンカパの思想的展開を歴史的視点から記述することがいかに困難であるかを物語っている。序章において著者はツォンカパに思想的变化があつたことを指摘するが(p.17)、終章で著者自身が率直に認めているように「ツォンカパの思想が変わったかどうかは未だ謎である」(p.383)。また、著者が「二諦に関する理解(あるいは少なくとも記述体系)が変化したと考えられる」(p.173)と述べるように、仮に思想的变化を認めるとしても、その変化が思想内容に関するものであるか、それとも記述形式に関するものであるかは確定し難い。

ともあれ、ツォンカパの中観思想を教義的視点からではなく、歴史的視点から捉えるという研究は重要であり、今後ともなされるべきであろう。その研究に当たって、ツォンカパの伝記を正確に読み解く作業が不可欠であることは言うまでもないが、現存する複数のツォンカパを紐解いてみても、幾つかの主要事績については、その年代を正確に特定するのが困難であるので注意を要する。

例えば、著者は第一章において『縁起讃』の著作年代を「三七歳」(p.26)と推定する。これは西暦一三九三年に相当する。ところが、他所では『縁起讃』の著作が「一三九六年のことなのか一三九七年に入つてのことなのかは定かではない」(p.87)と述べ、さらには「一三九七年頃に作られたと考えるのが妥当であろう」(p.95)、「一三九六年(四〇歳)の秋から一三九七年(四一歳)の夏までの約一年の間に書かれたものと考えられる」(p.113)とも述べている。

このような記述の揺らぎは、『縁起讃』の著作年代を伝記資料に基づいて特定するのが困難であることに起因するのであろう。かつて Rudolf Kaschewsky によって研究されたチャハル・ゲシエ・ロサン・ツルティムのツォンカパ伝に与えられる年代を、我々はもはや盲目的に受け入れることはできない。複数の伝記資料の批判的検討に基づく主要

事績の年代確定は、将来なされるべき課題の一つである（なお、『縁起讃』の著作年代に関しては根本裕史『ツォンカパの思想と文学―縁起讃を読む』平楽寺書店、二〇一六年、pp.13-17を参照願いたい）。

五

そもそも「ツォンカパ中観思想」とは何なのか。ここまで評者は本書に従って「ツォンカパ中観思想」という表現を受け入れてきた。また、評者自身も、自らの論述の中で「ツォンカパ中観思想」やそれに類する表現を用いることがある。しかし、本書の読解を通じて改めて問い直す必要があると思われるのは、この極めて単純でかつ本質的な問題である。

著者は序章（p.2）において「自性」という語の多義性を認めつつも、第九章においては法性と同義で肯定的な意味を持つ「自性」をツォンカパの思想圏から退ける。その理由は、法性と同義の自性に関するツォンカパの言明が、彼自身の思想を反映したものではなく、チャンドラキールティの言葉の祖述に過ぎないからである。著者が考える「ツォンカパ中観思想」とは、「中観派の不共の勝法」およびそれに付随する諸理論に他ならない。その枠組みの中で整合的に説明できないものは全て「ツォンカパ中観思想」から排除される。「ツォンカパ中観思想」とは多様性や矛盾を一切含まない完全無欠の体系である。ツォンカパ後期二諦説ですら、その完全性を損なう汚点となる。

だが、果たしてツォンカパはそのような思想体系を自ら形成しようとしていたのであろうか。彼の著作の中では、ナーガールジュナやチャンドラキールティといったインド中観派の論師達の言葉が縦横無尽に引用される。ツォンカパは彼らの言葉を謙虚に読み解くことを通じて、そこに込められた彼らの思想が何であるかを明らかにしようとしている。決してツォンカパは自身の独創的な思想を展開しようと意図しているのではない。ツォンカパの思想に「獨自性」（rang bzo）―あるいは「捏造」の痕跡―を認めるのは、むしろ、彼を執拗に批判したサキヤ派のコラムパや、セ

ルドク・パンチエンである。

ツォンカパの伝統を継承する後代のゲルク派の学僧達は、ツォンカパの著作中に完全無欠の体系を求めるのではなく、多様な解釈の可能性を見ているように思われる。ゲルク派の各僧院で学ばれる中観の教本 (*vb. chra*) 群はいずれもツォンカパの著作に依拠して書かれているが、それらの中には相互に一致しない見解がしばしば見られる。教本作者達の間で見解の不一致が起こるのは、他ならぬツォンカパの著作の中に、多様な解釈を許容する表現が存在するためである。僧院で学ぶ僧侶達はそのことを承知した上で、各僧院の見解の違いを問答の格好の題材としている。ダルマキールティの『量評釈』の解釈には「幾百もの流儀」 (*lugs brgya ma*) があるとチベットの学僧達は言うが、我々は同じ言葉をツォンカパの著作に向けて使っても良いであろう。

「ツォンカパ中観思想」と言われるものを固定的に捉えることは不可能に近い。「自性とは、そのものをそのものたらしめている本質のことである」 (*gral*) と著者は言うが、「ツォンカパ中観思想」をそのものたらしめている本質がどこかにあるという考えにとらわれる必要はない。「ツォンカパ中観思想」とはインドで生まれた中観思想に真摯に向き合う一人の人間が残した、多種多様な思考実験の軌跡のようなものかもしれない。「ツォンカパ中観思想」の本質をどこかに求めるならば、その試みは徒労に終わる。しかし、「ツォンカパ中観思想」といったものを想定することなしには、ツォンカパを主たる対象とする研究は成立しない。本書が結果として我々に突きつけているのは、「ツォンカパ中観思想」研究の存在理由を根底から覆しかねない重大な問題なのである。

二〇一八年発行・大東出版社

382 pp.

ISBN 978-4-500-00770-7